



喜多方市の 街の基礎を 造った上杉氏

福島県喜多方市は、上杉景勝・直江兼続時代の慶長3年(1598)、現在のような宿場としての街割が造られ、街の基礎が出来ました。

喜多方市の小荒井には、葺名時代には旧新宮氏家臣であり、後に松本氏家臣となる小荒井氏が治めていた「坂井館」がありました。天正10年(1582)、裏磐梯の桧原を治める穴沢氏家臣の大荒井氏と小荒井氏との抗争で、小荒井氏や穴沢氏家臣外島氏・赤城氏が戦死しています。小田付は、天正10年から会津若松市門田町面川の佐瀬大和種常(たねつね)が治め「小田付館」を造っています。そして、小荒井とともに市を開いている。喜多方駅近くの塚原は、若松市北会津町下荒井の富田氏の支配下で「塚原館」がありました。

『新編会津風土記』慶長3年(1598)6月20日「上杉家臣の大盛勘助が小田付の町割と市祭の完成を祝い米2石を送る」との記録があり、宿場と六斎市を開いています。後に3度(回)分を小荒井へ移しています。慶長12年には、2日6日12日22日26日を小荒井の市祭としています。また、慶長6年(1601)5月28日、上杉氏は「耶麻郡代官満願寺が熊倉村(喜多方市熊倉)に検断物江土佐を置き、11月26日に六斎市を開催する」とあり宿を整備しています。